

目的 女性の生き方を考える上で、進路決定は重要な意味をもつと考えられる。本研究では、専攻の異なる学科に在籍する女子学生が、過去（大学及び専攻科決定時）や未来（職業決定時）の進路決定において、どのような意識で行うか、又それらの際に家族影響がどのようなものであつか、等を比較検討し、女性の進路決定における意識と家族的影響要因について考察したいと考える。

方法 岡山市内の私立短期大学に在籍する家政科、幼児教育科、1、2年生 それぞれ275名、306名 計681名に対してアンケート調査を行った。調査時期は以下である。家政科：昭和61年6月 幼児教育科：昭和61年12月

- 結果
- ① 大学や専攻科の決定時期は家政科は高校時代、特に高3時に決定する者が多いが、幼児教育科は中学時代から高2時期に決別前後が決定し、決定時期に差がみられる。
 - ② 専攻科の決定理由は、家政科では「将来の家庭生活のため」、幼児教育科では「仕事資格を得るため」と、それぞれの目的意識は明確である。
 - ③ 生育環境において専攻科を決定づける要因の有無は、家政科よりも幼児教育科が多く有とし、半数近くが要因の存在を明らかにしている。
 - ④ 大学や専攻科の決定主体者は、両科共に「自分」が最も多いが、特に幼児教育科にその割合が高い。
 - ⑤ 生育中に受けた家族影響は、両科共同様で、最大の影響を受けたのは「母」であり、その影響は「良かった」又は「どちらともいえない」が多く、否定的な者は少数であった。